

# 美乳の秘密

睦月影郎



## 第一章 妖艶なボス

2

「さあ、どうしたらいいのかしら」

紗貴子が囁くと、朝井は激しく興奮しながら行動を起こした。相手が上司とかいう意識も吹き飛び、自分が何をし、どうしてこんな展開になったのかも分からないほど舞い上がっていた。

長身の年上美女に甘えるように、添い寝している彼女の腕をくぐって腕枕してもらった。

「これでいいの？ それから？」

紗貴子は拒まず、朝井を胸に抱いたまま言った。朝井は目の前いっぱい広がる巨乳に顔を埋め、甘いフェロモンに包まれてじっとしていた。

彼が何もしようとしないので、紗貴子は自分から行動してきた。

そっと朝井の頬に手を当てて顔を上向きにさせ、ピッタリと唇を重ねてきたのだ。

「う……」

いきなり唇を塞がれ、朝井は思わず呻いた。

切れ長の眼差しが近々と彼の目を覗き込み、朝井は美貌が眩しくて薄目になった。彼女の唇は柔らかく、ほんのり濡れて心地よく吸い付いてきた。

紗貴子の熱い吐息は悩ましい湿り気を含み、上品な甘い匂いがした。朝井がうっとり酔いしれていると、触れ合ったままの唇がピチャツと開かれ、間からヌルツと舌が伸ばされてきた。思わず前歯を開いて受け入れると、紗貴子の舌は慈しむように彼の口の中を隅々まで舐め回した。

舌で触れると、それはトロリとした甘い唾液に濡れ、何とも柔らかく心地よい感触だった。

紗貴子は濃厚なディープキスを続けながら彼の手を握り、そつと巨乳に導いた。手のひらを重ねて押しつけると、膨らみの柔らかかな弾力が伝わり、コリツとした乳首も触れた。

「吸って……。遠慮なく、好きなようにして」

ようやく唇を離して囁き、紗貴子は彼の顔を胸に押しつけてきた。

朝井は薄桃色の乳首にチュツと吸い付き、もう片方の膨らみにもモミモミと手のひらを這わせた。ほんのり汗ばんだ胸の谷間や腋の下から、何とも艶めかしく甘ったるいフェロモンが揺らめき、たちまち朝井は夢中になってしまった。

舌で弾くように乳首を舐め、唇に挟んで強く吸い付き、もう片方にも執拗な愛撫を繰

り返した。

「ああ……」

紗貴子が熱い喘ぎを洩らし、何度かビクツと熟れ肌を波打たせて反応した。

朝井は心ゆくまで巨乳の感触を味わってから、滑らかな肌を舌でたどりながら下降していった。

ムッチリした太腿の間に身体を割り込ませて腹這いになると、紗貴子も自分から両膝を開いた。

神秘の中心を目の当たりにし、朝井は思わずゴクリと生唾を飲んだ。この世で一番多く入浴しているソーブ嬢とは違い、ナマのフェロモンを籠もらせた美女のワレメだ。

股間の丘に茂る恥毛は黒々と艶があり、濃くなく薄くなく程良い範囲に煙っていた。真下のワレメからはピンクの花びらがはみ出し、早くもネツトリと蜜を宿して、今にもトロリと滴りそうなほどにシズクを膨らませていた。

そつと指を当てて花卉を開くと、内部はさらにヌメヌメと大量の潤いに満ちていた。奥には悩ましく息づく膣口があり、細かな襞が囲んでいる。上の方では包皮を押し上げるように勃起したクリトリスが、真珠色の光沢を放って顔を覗かせていた。

しかも内腿に挟まれた股間全体に、生ぬるい熱気と湿り気が籠もり、ほのかな女の匂いを含んで朝井を誘っているようだった。

もう我慢できず、朝井は紗貴子の中心にギュツと顔を埋め込んだ。

柔らかな恥毛に鼻をこすりつけ、隅々に籠もったフェロモンを吸い込んだ。それは甘ったるい汗の匂いに、ドキドキするような魅惑的な成分が混じり、刺激が鼻腔から一気に股間に響いてくるようだった。

舌を伸ばし、まずは花卉の表面に触れながら、徐々に内部へ差し入れていった。中は熱くヌルヌルし、柔肉が心地よく舌を包み込むようだった。

細かな襞をクチュクチュと掻き回すように動かし、溢れる愛液をすくい取りながら、ゆつくりとクリトリスまで舐め上げていった。

「ああッ……！」

紗貴子がビクツと下腹を波打たせて声を上げ、張りのある内腿で彼の両頬をきつく締め付けてきた。

こんな美女が未熟な自分の愛撫で感じてくれるのが嬉しく、朝井は本格的に彼女の腰を抱え込みながら、執拗に舌先をクリトリスに集中させた。

「アア、ダメ、そんなに舐めないで、いっちゃう……！」

紗貴子はたちまち激しく身悶えはじめ、ガクガクと下半身を痙攣させた。かなりクリトリスは弱いのか、その狂おしさはとても演技とは思えず、本当に高まっているようだった。

「ああーッ……！」

紗貴子は身を反らせて硬直し、そのまま肌を震わせていたが、間もなくグツタリと力を抜いてしまった。

愛液は大洪水になって朝井の顔面をヌメらせ、彼女はそれ以上の刺激を拒むように腰をよじった。ゴロリと横向きになって彼の顔を股間から追い出すと、ハアハアと荒い呼吸を繰り返した。

朝井はまだ舐め足りないように、今度は目の前に迫った豊満なお尻に顔を埋め込んだ。指でグイッと谷間を開き、奥でキュツと閉じられているピンクのツボミにも舌を這わせた。

谷間にも淡い汗の匂いが籠もっていたが、ツボミそのものには秘めやかで生々しい匂いは感じられず、少し物足りなかった。こんな美女のフェロモンなら、何でも知りたかったのだ。

舌を蠢かせると、細かな襞がキュツキュツとくすぐったそうに収縮した。さらに唾液にヌメったツボミにヌルツと舌を潜り込ませると、

「あう……、も、もうやめて……！」

紗貴子が再び身悶え、お尻を庇かばうように仰向けになってきた。

ようやく気が済んで、朝井は彼女に添い寝し、すっかり濃くなった胸元のフェロモン

で胸を満たした。

「舐めるの、好きなの……？」

まだ呼吸を弾ませながら紗貴子が囁く。

「ええ。女性の自然のままの匂いは初めてだったから」

「意地悪ね。シャワーも浴びていないのに。それに今回は、あなたの射精の様子を観察したかっただけなのに……」

「それが、仕事に関係あるんですか？」

「あるわ。とにかく済ませましょう。もう出るでしょう？」

紗貴子は言いながら身を起こし、今度は仰向けの朝井の股間に顔を寄せてきた。

やんわりと手のひらで幹を包んで屈み込むと、先端に熱い息が触れ、長い髪がサラリと内腿に流れた。

そのまま紗貴子は、ためらいなくチロツと先端に舌を這わせ、尿道口から滲んでいる粘液を舐め取り、ピンピンに張りつめた亀頭全体をおしゃぶりしはじめた。

「ああ……」

朝井は、激しい快感に思わず声を洩らした。

紗貴子の舌はチロチロと小刻みに蠢き、幹を下って緊張に縮こまった陰囊を舐め回し、再び舐め上げてスッポリと含んできた。

紗貴子の口の中は温かく、たちまち朝井の快感の中心は美女の清らかな唾液にまみれた。

彼女は一気に根元まで呑み込み、付け根を唇で丸く締め付けながら、熱い息で彼の恥毛をくすぐった。内部ではクチュクチュと舌が蠢き、朝井は急激に高まっていった。まるで身体ごと美女の口に含まれ、舌で右に左に転がされているような快感だった。

「い、いきそう……」

警告を発するように口走ると、

「いいわ。我慢しないで出しちゃって」

口を離れた紗貴子が囁き、すぐにまたパクツと含んできた。今度は顔全体をリズムカールに上下させ、スポスポと口全体で摩擦してくれた。

何という快感だろう。歯が当たることはなく、唇と舌の感触、唾液のヌメリが心地よくペニスを刺激した。朝井はこのまま、紗貴子の甘い匂いのする口の中に、どこまでも深く入っていきたいと思った。

「く……！」

とうとう激しい絶頂の快感に全身を貫かれ、朝井は呻きながらペニスを震わせた。本当に、こんな美人の上司の口に出して良いのだろうか、という一抹のためらいはあったが、そんな思いすら快感に拍車をかけた。



熱い大量のザーメンが、マグマのように勢いよく噴出した。

「ンン……」

喉を直撃された紗貴子は小さく呻き、すぐにスポンと口を離した。そしてなおも快感に脈打つペニスを手のひらでしごき、ザーメンの飛び散る様子を目の前で見つめた。

口に飛び込んだ第一撃の分は、そのまま飲み込んでしまったのだろう。余りの噴出は彼女の顔を汚し、白濁した粘液が涙のように紗貴子の頬を伝い流れた。

それも厭わず、紗貴子は朝井の快感の時間やザーメンの量などを冷静に観察しているようだった。

ようやく最後の一滴まで絞り尽くした朝井は、グツタリと全身の力を抜いた。

「もう出ない？」

「も、もう手を離して……」

いつまでもペニスをしごかれ、射精直後で過敏になった朝井は、降参するように口走って身をよじった。

ようやく紗貴子も手を離してくれ、強張りを解いていくペニスを眺め、さらに尿道口から滲んだ白いシズクをペロツと舐め取った。

「バスルーム借りるわ」

紗貴子は言っつてベッドを下り、手と顔を濡らしたザーメンを垂らさないよう押さえな

がらバスルームへと入っていった。

横たわったまま、放心状態の朝井は余韻に浸る余裕もなく、紗貴子の意図が分からずに頭の中を疑問符でいっぱいにしていた。

(続く)

睦月影郎 (むつき・かげろう)

昭和31 (1956)年1月2日生まれ。山羊座、B型。神奈川県横須賀市出身。県立三崎高校卒業後、看板屋、工員、飲食店勤務などを経て、23歳で官能作家デビュー。

熟女もの少女ものに関わらず、匂いのあるフェチックな作風を得意とする。本名の奈良谷隆では戦記やアクション小説を書き、また、ならやたかし名義ではマンガやイラストも描く。